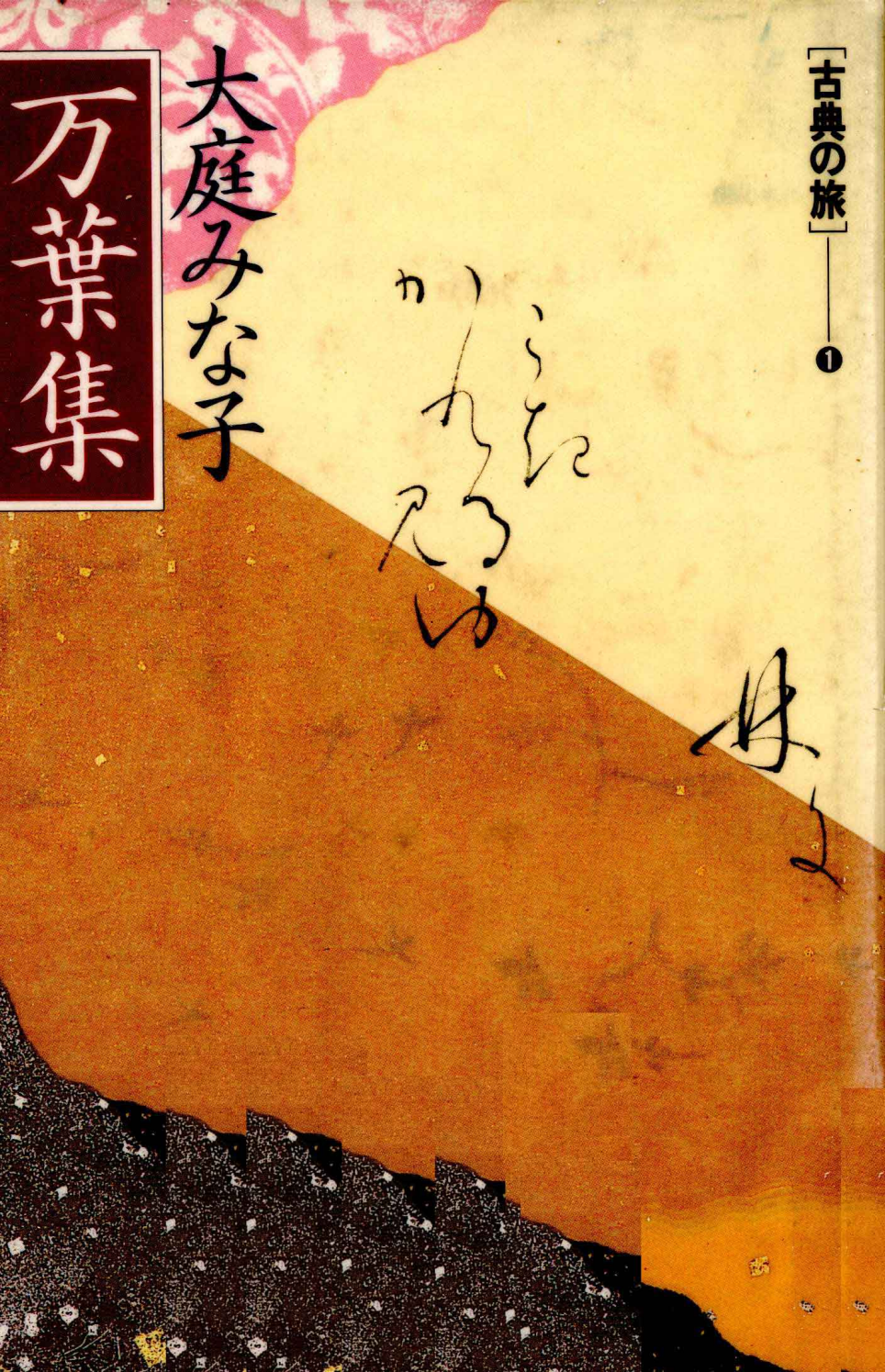
[古典の旅]——❶

万葉集

大庭みな子



[古典の旅]——❶

万葉集

庭みな子

講談社

古典の旅——①
万葉集
第一刷発行　一九八九年一一月一〇日

著者　大庭みな子
装幀　岡村元夫
装画　王朝継ぎ紙研究会　主宰　近藤富枝
書　高野玉兎　地図　磐広人
写真　講談社写真部江頭徹
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一
電話(〇三)九四五-一一一一(大代表)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定価　一二〇〇円(本体一一六五円)

ISBN4-06-192071-5 (文1) ©Minako Ohba 1989 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

万葉集　目次

はじめに……9
大和……18
三輪山　初瀬　20　香具山　雷丘　36　巻十六から　43
近江……54
奈良……79
筑紫……93
筑紫へ　93　小倉から志賀島　113　大宰府　122　松浦の仙女　152

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東国……163
富士 163　葛飾の真間の手児名 175　多摩川 186　筑波山 190
万葉の終り、越中……198
あとがき……229
解説・うたびとたちの始動……遠藤　宏……231

珠洲
中島
机島
氷見
七尾
十二町
雨晴海岸
三上山
伏木
新湊
勝興寺
高岡
富山
金沢
立山
伊香保
多胡
佐野
筑波山
敦賀
塩津
高島
崇福寺跡
比叡山
唐崎
琵琶湖
三上山
江神宮
京都
大津
蒲生野
平田
奈良
桜井
大阪
山辺の御井
安礼の崎
伊良湖岬
熊野川
安倍川
清水
田子の浦
三保の松原
富士山
調布
多摩川
江戸川
弘法寺
手児奈堂
市川
利根川

大庭みな子の万葉集の旅

□ は著者が歩いた地名

奈良・大和

磐姫陵
元明陵
聖武陵
佐保川
奈良
春日山
高円山
天理
石上神宮
山の辺の道
崇神陵
景行陵
檜原
初瀬
長谷寺
吉隠
二上山
耳成山
箸墓
三輪山
大神神社
桜井
橿原
香具山
鏡王女墓
雷丘
畝傍山
甘橿の丘
安騎野
葛城山

万葉集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

書き残された文字の不思議、その文字を綴り合わせて書き記された文学が時の風のゆき過ぎる中でさまざまに甦る妖しさに誘われて、旅を思い立つ。

どこそこの景色はえも言われないものだそうな、どこそこにはこうこうしかじかの世にも珍らしい話があるそうな、某村の某家の娘は絶世の美人であったがその生涯は云々、こういった話は人の口から口へと伝えられる。その物語が人の心を打つ忘れられない人の世のさまであれば、文字を持つ民族であれば、書きとめて後の世に伝える。

そうした物語の行間から立ちのぼる煙はたなびいて寄り添い、ゆく雲の不可思議さで、同じ言語で生きている民族を覆(おお)っている。それは、散り敷いた木の葉の下を流れる水であり、山の端(は)に立ちこめる靄(もや)であり、さまざまに形を変えて走る雲である。

そんなわけで万葉の旅は、ゆく雲を見て、気もそぞろになるといったものだ。それにしても、世界の民族で千何百年も昔に書きとめられた詩歌を、現代人が今も折にふれて口誦(くちずさ)み、

愛唱している例は日本以外にはあまり聞かない。

万葉集の研究者・専門の学者を除いては、万葉集を原文の万葉仮名のままで読む人は少ないであろうが、現代の日本語で普通使われている漢字に平仮名混りのものにして、わたしたちは現代の詩歌を読むのとはさしてかわらない気分で愛読している。

わたしは一九八八年の四月から十二月まで朝日新聞に「虹の橋づめ」と題して毎週エッセイを書いたが、その頃すでにこの万葉の旅の企画があって、思い立つままに歌を追う旅をしていた。そこで、ときに万葉の歌を引用したエッセイを混えることがあったのだが、そうしたときは他のどんな内容のものよりも大きな反響があり、たくさんの方々からお手紙をいただいた。それらの手紙の文面は、自分も同じように万葉の歌を追う旅をしているが、どんなに万葉の歌を愛しているかということに加えて、万葉集を読んだことはないが、引用された歌の中で使われている言葉がひどくなつかしい故郷の匂いのするものなので、つい筆をとったというものまで、ほとんど日本全国、北海道から九州に至るものだった。

わたしは今更ながら、万葉集の持つ、かくも大きな、民族の言葉の力に深く打たれたのである。千数百年前の民族の言葉をこのように伝え、歌い、愛している限り、わたしたちは深ぶかと底知れぬ文化を持つ国民と言えるだろう。

万葉集の四千五百余首の歌には千年以上昔にわたしたちが今暮している同じこの国土に生

きた日本人の心が息づいている。わたしの正直な感想を述べるならば、その全てが傑作、秀歌というわけではないが、にもかかわらず、そのように歌った人がそこに確かにいたという脈打つ生命の響きがある。のびやかに麗わしい人の世のさまばかりではなく、切なさ、悲しさ、醜さ、更には、人の心のあさましさ、愚かさ、情なさの今の世に変らぬ人の生きざまがそこにはある。

まず、他人に教えられたものではない自分の素直な心で万葉集を読もう。そして、もし、心に残る歌があれば、その歌に歌われている土地のかたちを確かめてみたくなる。三輪山は、香具山は、奈良山は、佐保川は、大津の都の湖は、富士の山は、多摩川は、筑紫の海は、それらは今、どのような形で、そこにあるのであろう。それらの山や川や海、天と地は、そこに生きた人間をどのように眺めたのであろう、天を仰ぎ、地に伏して、人はどのように生き続けたのであろう、そんなことを考えたくなる。

何しろ四千数百首の歌であるから、とても全歌に触れるわけにはいかず、全く自分の好みで、いくつかの場所に限って、心に残る歌に寄せて、己れの心の中にとりとめもなく往きかうものを書きとめてみた。

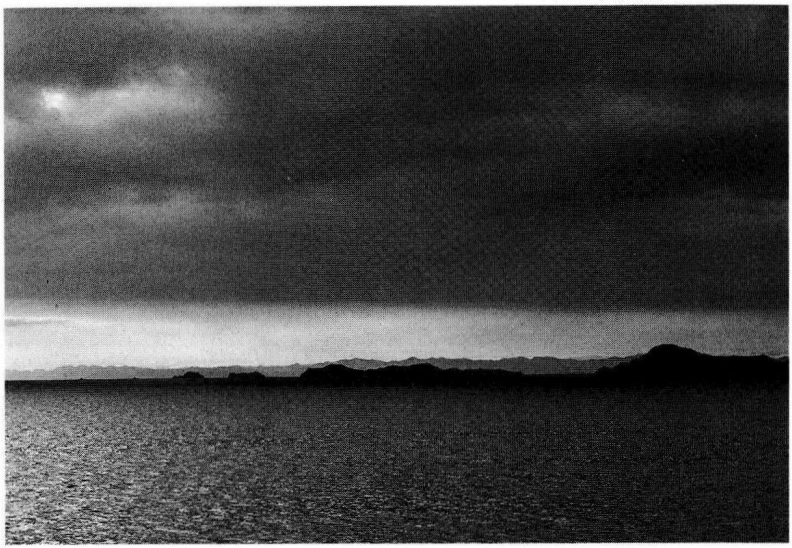
この作業は、千数百年前、万葉人がこのように万葉集を編み、このように詠った心に似ている。万葉人は古歌を口誦み、何かをつけ加え、生きている気分になったのである。それと

同じ心で、わたしは万葉集について語り、後の世の人のために、ここにこうして古い歌を読んだ者がいた、と語り伝えたい。

さて、万葉集はいったいどのような歌集であるか。万葉の歌を追って旅を思い立つような人なら、万葉集についてはある程度御存知であろうし、自分の好みの歌人も歌もあろう。まずいちばん大切なことはあなた自身の心に響く歌を自分で見出すということだ。その上で、その思い入れのある歌人なり歌なりがどういう場所でどんな情況で詠み、その歌が詠まれたかを考えているうちに、次つぎとべつのいろいろな歌人の姿もその時代も、そして万葉の成立の過程も見えてくる。

心を惹かれない作品、好きでもない作品や、その作品にまつわる時代にどうして興味が持てるだろう。だから、何よりもまず、おすすめすることは好きな歌を中心に万葉の世界をひろげてみるのがよい。人麻呂が好きなら、人麻呂から、家持が好みなら家持から、憶良が好きなら憶良から、坂上郎女なら坂上郎女から、その周辺へ、その依って来るところへ、それが流れてゆく方向へ、ひろがってゆくところへと読み進めてゆけばよい。

だが、こういう企画を引き受けたからにはある程度の解説めいたこともしなければならないものらしいから、万葉集について多くの研究家・学者たちが今までに調べ、論じたおおよそのことをごく簡単に述べることにする。



詩人たちがしげく往来した瀬戸の海と、本州の山なみ。

奈良時代の朝廷の建物の遺構(現在の唐招提寺講堂)。

万葉集は五世紀前半から八世紀半ば（七五九）まで約三百年くらいの間に歌われた日本の歌を、古くは伝承のものを含めて、短歌、長歌、旋頭歌合わせて四千五百余首の歌を大伴家持辺りが中心になって、それ以前にすでにあったいくつかの歌集をもとに編集されたものだろうと言われている。そして現在の二十巻の形をととのえる以前に何段階かの過程を経て、何度かに亘って次つぎと巻を増して編纂されたものであろうとされている。この編纂の過程は興味のある方はその時代の政治背景など歴史と合わせて追究するのも面白い。

万葉集最後の歌は大伴家持が、天平宝字三年正月（七五九）に因幡の国庁で詠んだものである。それは少なくとも第二十巻について言うなら、その成立はそれよりも早くはない。いちばん早いものは、伝承であるとしても仁徳帝の頃のものだ。

万葉集中いろいろな歴史的人物の作歌が採録される場合、たとえば柿本人麻呂のようなその生涯のきわめて曖昧な大詩人は没年も不確かで、ほぼ七〇七年から七一〇年辺りとされてはいるが、人麻呂のその歌がどの時点で、どのような時代の情況の下で、採録されたかによって、編集の方針はかなり違ってくるだろう。

かりに人麻呂のある歌が死後何年か経ってから採録されたとすれば、その年月によって故人のかなりの不都合な部分が時効になる。人麻呂がどのように生き、どのように死んだか、またその時代の人びとが、なかんずく、権力者たちが人麻呂をどのようにみつめ、どのよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com